

## よりよい社会のあり方をともに問い続ける社会科教育

### (1) 主題設定の理由

- ① 近年、生成 AI 等のデジタル技術が急速に進化し、知りたいことや考えたいことへの答えを、いつでも簡単に得られる時代になってきた。そのことにより、社会生活の中で自ら問題を見いだしたり、解決策を考えたりする機会が減少しつつある。
- ② これからの時代を生きる子どもたちには、よりよい社会を志向し、自らの生き方やあり方を考え、「自らの人生を舵取りできる力」が必要不可欠である。そのために、主体的・対話的で深い学びの実装を目指すことが求められている。  
(令和7年9月 中教審「論点整理」より)
- ③ 多様な個性や特性、背景を有する人が多くなっている実態があるからこそ、「自分自身にとってよりよい社会」のあり方について考えるだけでなく、「自分自身にとっても、他者にとってもよりよい社会」のあり方についても考えることが求められている。  
(令和7年10月 教育課程部会社会科ワーキンググループ資料より)
- ④ 現行学習指導要領に示されている通り、社会科では、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し、知識や思考力等を基盤として社会のあり方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育てていくことが求められている。
- ⑤ 社会的現象から見いだした問題について、社会的な見方・考え方を働かせながら自分ごととして解決策を考えるとともに、協働的な学びを通して、より多角的に解決策を考えていくことができる学習を展開していくことが大切となる。

これらの理由から、研究主題を「よりよい社会のあり方をともに問い続ける社会科教育」と設定する。

### 「よりよい社会のあり方を問い続ける」とは

「よりよい社会」とは自分だけでなく、自分を含めたより多くの人々が豊かに暮らすことができる社会を指している。現代、または過去の社会をつくり上げてきた人々の営みや社会の仕組みのすばらしさ(見事さ)から学ぶとともに、多くの人々が幸福な人生を送るために解決すべき問題点や課題を発見し、自分ごととして捉えて、問題の解決策を深く考えていくことを大切にしたい。

また、一つの学習問題についての学びが一時間で完結するのではなく、単元内や単元間でつながりを持ち、子どもたちの問題意識が連続していくことを目指したい。それまでの生活経験や学習で得た知識・技能、思考力・判断力・表現力等を生かして問題を追究することで、学習問題を解決することにとどまらず、新たに解決したい問題を見いだしたり、自ら行動を起こそうとする気持ちを引き出したりすることが、よりよい社会をつくる担い手を育てることにつながっていくと考える。

### 「ともに問い続ける」とは

よりよい社会のあり方を考えるためには、物事を多角的に捉え、さまざまな立場に立って考えることが必要である。そのためにも、見いだした問題を他者と共有し、互いを尊重し合いながら問題解決に粘り強く取り組んでいくことが、一人一人が生きて働く知識を獲得し、思考を広げたり深めたりすることにつながっていくと考える。

## (2) 横浜市小学校社会科研究会（以下、浜小社研）が目指す社会科教育

### ①これまでの浜小社研の研究（『横浜の社会科五十年』より一部抜粋）

年度	研究主題 ～副主題～	備考
1950	（各区支部での独自の計画による研究）	浜小社研 発足
1960	（浜小社研初の全市的な研究主題設定） 問題解決学習に立った新しい単元系列の研究	
1981	子ども自らの社会的なあり方の確立をめざした授業の構成	1981 年度 全小社①
1995 ～2007	共に生きる社会をめざし、自らのあり方を問い続ける社会科教育 ～子ども自らが動き、考えを深め合える授業をどう創ったらよいか～	1995 年度 全小社②
2008 ～2017	社会とのかかわりを実感し、自らの生き方を問い続ける社会科教育 ～子どもが社会的事象を自分とのかかわりでとらえ、主体的に追究する授業をどう創ったらよいか～	2009 年度 全小社③
2018 ～2025	人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育 ～学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方～	2020 年度 全小社④
2026 ～	よりよい社会のあり方をともに問い続ける社会科教育 ～人の営みを自分とのかかわりで捉えて、対話を通して学びを深める授業づくり～	2028 年度 全小社⑤

浜小社研では一貫して、共に生きる社会の創造を目指して、変化する社会のなかで人間相互のつながりを強め、人権を尊重するとともに、自らのあり方、さらには生き方を問い続ける教育を大切にしてきた。その中でも特に力を入れて取り組んできた3点を挙げる。

#### ●個のみとり

「授業記録の作成・分析」「注目児童の設定」「座席表の活用」などの研究のアプローチにも表れているように、「個」を大切にしながら学習を構成してきた。個々のものの見方や考え方は個性的であるという立場に立ち、個の問題意識から生まれる追究と変容を大切にしてきたという点は、浜小社研の社会科の大きな特徴である。社会的事象から見いだした問いから学習問題が「子どもの言葉」でつくられ、その解決に向けて調べたり考えたりして追究する学習過程を、子どものみとりを生かしてつくり上げてきた。

#### ●個を生かした集団での学び合い

子どもの問題意識から学習を展開することで、子どもの学習意欲を引き出し、生活経験やそれまでの学びを生かして考える力を育ててきた。一方で、思考をより広げたり深めたりできるように協働的に学ぶことも大切にしてきた。現在、全国的にも求められている「一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すこと」は、浜小社研が取り組んできた「子どもが社会的事象に主体的に関わる」「子どもが自分の言葉で語る」授業の構築と重なる部分が多い。

#### ●問題解決的な学習

社会的事象の価値や意味に迫ることができるよう学習問題を教師と子どもが一緒につくり、単元または一時間の見通しをもって学習に取り組むことができようしてきた。このように問題解決的な学習を大切にしてきたことは、主体的・対話的で深い学びの実現にも生かされている。

### ②現在の主な成果と課題

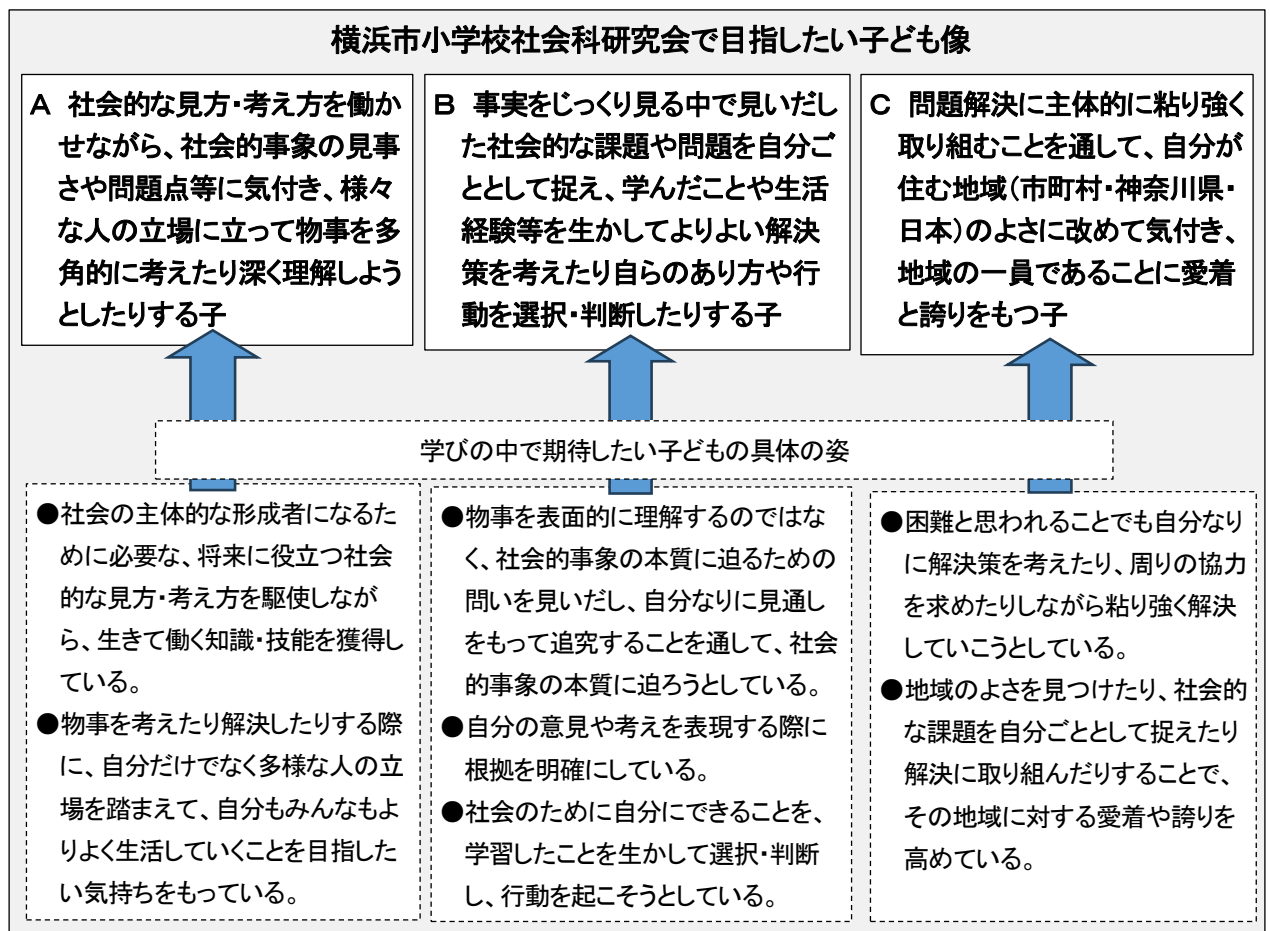
令和2年度の全小社神奈川大会では、これらの研究の積み重ねを生かして、「人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育」という主題を設定し、これからの社会を生きる神奈川の子どもたちが「身に付ける資質・能力」を明確にして、副主題を「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」として、授業実践、提案に取り組んだ。日常の生活や社会とのかかわりの中で学んだことをどのように生かしていくかということが、よりよい未来を創造していく子どもの育成につながるという神奈川の考える社会科教育を全国に発信することができた。

以降、令和7年度まで研究主題・副主題を継続して、研究を進めてきた。その中で見られてきた主な成果と課題は次の通りである。

成果	課題	今後に向けて
単元を通して学習問題を追究する学習を大切にすることで、問題解決的な学習の充実が図れた。浜小社研全体として、目指す学習過程のあり方が確立してきた。	副主題として学習過程に間口を絞ったことで、教師が学習過程をつくる意識が強く、単元構想が地域や学校に関係なくパターン化した一面がある。	見通しをもつことを大切にしつつ、その学校や学級のよさを生かした、多様な学習過程のあり方を吟味していきたい。
子どもが身近さを感じられる（地域）教材を活用した導入を展開し、子どもの問題意識を生かした単元を見通す学習問題を子どもと教師でつくることで、子どもの主体的な学びを促すことができた。	「本気の学習問題」が生まれるように教師が子どもの思考を引っ張りすぎてしまったり、子どもの思考に寄りすぎて社会的事象の本質に迫ることができなかつたりした。	単元目標を達成できる学びを目指して、子どもの問題意識を大切にしながら教師が必要に応じて学習計画の修正をしていくことをより大切にしていきたい。
「人の営み」に着目することで、子どもが学んだことを現代の社会でよりよく生きていくための資質・能力を養うことにつなげられた。	子どもの具体的な姿がどのような資質・能力につながっているかの検証が不十分だった。	浜小社研として、目指す子ども像をより明確にしていきたい。

### ③これからの浜小社研が目指す社会科教育

## よりよい社会のあり方をともに問い続ける社会科教育



#### ④研究副主題の設定理由とその捉え

##### ～人の営みを自分とのかかわりで捉えて、対話を通して学びを深める授業づくり～

浜小社研では、平成30年度より研究副主題を「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」として、8年間研究を継続してきた。その成果として、「子どもが主体的に、数時間先の見通しをもって学習に取り組めるような単元を見通す学習問題をつくり、学習計画を立てて、子どもが主体的に学習を進めていく学習過程」を大切にしたい授業の実践を積み重ねていくことができた。

その成果の大きな要因として、「人の営みに学ぶ」ことを大切にしてきたことが挙げられる。単元の導入で、具体的な人の営み（社会的事象）に出合う時に子どもから生じる問題意識・つぶやき等を丁寧にみとり、それらを生かして学習問題や単元の計画を子どもと一緒にすることを大切にすることができた。

また、前述の通り浜小社研では、「個の学び」を大切にしつつ、個と個が集団の中でどのように対話的に学び合うのか、対話を重ねながら学び合うことでどのように学びが深まっていくのかを大切にしてきた。

これらのことを今後も大切に、子どもたち一人一人が自らの学びの深まりを実感できるようにしていくことを目指して、研究副主題を「人の営みを自分とのかかわりで捉えて、対話を通して学びを深める授業づくり」と設定した。

##### 「人の営みを自分とのかかわりで捉える」とは

「人の営みを自分とのかかわりで捉える」とは、教材として取り上げる人の具体的な仕事や取組を学ぶことを通して、その人の考え方や生き方、人がつくり上げてきた社会の仕組み等から、自分の考え方や生き方を問い直したり、見つめ直したりすることである。

また、その人を通して見えてくる社会や産業、歴史等の関係性や仕組などの概念を形成していくことでもある。子どもがそれぞれの目的意識をもって、様々な問題に取り組みながら仕事などに従事する人の技・業（わざ）や知恵、工夫などにふれることで、本物と出合う実感的な学びが深まっていくと考えられる。本物であるからこそ、子どもが出合ったときに、そこに切実感が生まれ、本気になって、様々な立場から多角的に考えることのできる学びに繋がっていくと考えられる。

そして、その時代ごとの様々な課題や困難に立ち向かい、それらを乗り越えていこうとする人々の姿にふれることで、子どもたちもまた社会的な課題を自分ごととして捉え、自分たちの未来を切り開いていく力を身に付けていくことにつながっていくと考えられる。

##### 「対話を通して学びを深める」とは

対話的に学びを深めていくためにも、「自分との対話」「教材との対話」「他者との対話」「教師との対話」、それぞれの対話を学びの中で効果的に位置付けながら学習を進めていけるようにしたい。

子どもたちは一人一人がそれぞれ多様な生活環境の中で生活している。一人一人の感性や生活経験には違いがあり、そのため社会的事象に対する問題意識や考え方も一人一人違いがある。

子どもが矛盾や違和感を抱くような社会的事象に出合い（教材との対話・自分との対話・教師との対話）、異なる様々な意見や感じ方を出し合うことで（他者との対話）、子ども自身が追究したいと思える学習問題が生まれる。そして学習を進める中でも、獲得した知識を活用しながら他者と対話を重ねることで、単元当初よりも子どもたちの問題意識が深まっていく。その過程を通して単元当初の学習問題よりも、さらに社会的事象の意味や本質に迫ることができる学習問題をつくることのできる。

問題を追究する過程でも、同じ事実を根拠にしても子どもたちの考え方には違いが生じる。問題解決に向けて対話を重ねることで、子どもは様々な知識を獲得しながら、より多角的に社会的事象について思考していくことが期待できる。つまり対話的に問題を追究していくことが、子どもの社会的事象に対する見方や考え方を広げたり深めたりしていくことにつながると考えられる。

子ども自身が学習したことを振り返る過程で、単元当初と単元終末の自分自身の社会的事象に対する考え方の変容に気付いたり、自らの生き方やあり方について自問自答したりする（自分との対話）ことが、社会的事象についてより深く考え、生きて働く知識を獲得することにつながっていくと考えられる。